

第6学年「陸上運動（リレー）」の実践を通して

南部町立西伯小学校

田子 智浩 永井 翔馬

1 はじめに

(1) 運動の持つ特性

リレーは、バトンをつなぎながら、複数のチームで勝敗を競い合い、記録に挑戦していくことを楽しめる運動である。

バトンパスがうまくできて、記録が伸びたり、勝ったりしたとき、自分だけでなくチーム全体で、達成感や成就感を味わうことのできる運動である。

(2) 児童の実態【体育学習についてのアンケート(6月実施)より】

①体育の授業は好きですか？

(はい) 48名

理由 ・体を動かすことが好き ・体力がつくから ・外で授業できるから
・家でできないことが体験できる ・みんなとできて楽しい ・友だちと競い合えるから
・できないことができると嬉しい(達成感を感じる)
・意見交換をすると上達するから ・できないことでアドバイスがもらえるから

(どちらでもない) 15名

理由 ・泳ぐのは好きだが、走るの苦手だから ・できるものとできないものがあるから

(いいえ) 5名

理由 ・体を動かすのは好きではないから ・すぐ疲れるから ・走るの苦手だから

②好きなスポーツはなんですか？

陸上 7名、水泳 14名、ボール運動 26名、器械体操 6名、表現運動 3名、体作り 6名、その他 5名

③友だちと関わり合って活動するのは大切だと思う 68名

アンケートの結果から、体育は好きな児童が多いが自分の得意な分野に限っている児童もあり、苦手意識を持っている児童も多いことが分かる。また、他教科と同じように友だちと関わり合って活動することが大切であると感じている児童が多く、さらに、単純にチームとして活動する良さも感じているが、水泳、陸上などの個人の種目でも、技術についてアドバイスし合うことによって、できたことへの喜びを感じていることが分かる。

そこで、個々の記録の向上だけでなく、チームで記録を伸ばすことを目標に互いにアドバイスし合い、技能向上に取り組んでいくことを目指していきたい。

2 実践について

(1) 単元の目標

- ・ピッチやストライドを意識して、短距離走の記録をのばすことができる。

全力で走り、テークオーバーゾーン内で減速なくバトンパスをすることができる。(技能)

- ・自分の目標に向かって友だちと教え合い、友だちの学び方のよさやのびを認めたり、励まし合ったりしながら意欲的に学習しようとする。(態度)

- ・自分やチームにあった目標を決め、速く走ったりスピードを落とさずにバトンをつないだりする方法を考え、それを練習に生かして活動することができる。(思考)



(2) 指導について

- ・活動に入る前に課題をしっかりと提示し、技能を高めるための視点を明確にする。
- ・活動場面での役割を明確にする。(バトンをパスする人、もらう人、アドバイスする人)
- ・学習前後での変容に気づかせ、友だちと関わり合うことのよさを感じるようにする。

3 授業の実際 (5 / 6 時間目の授業から)

(1) 目標

- 全力で走り、テークオーバーゾーン内で減速なくバトンパスすることができる。(技能)
- チームの目標に向かって、スピードを落とさずにバトンパスする方法を考え、話し合うことができる。(思考・判断)

(2) 準備

学習カード ホワイトボード カラーコーン ミニコーン 音源 CD ラジカセ

(3) 学習内容

①支える学習 アップ チーム練習

②リレー練習 (前時までの課題に取り組む)

- めあてと学習の流れの確認
- 各チームごとに作戦タイムをとり、自分たちの課題を確認する。
- 課題を基に練習の実践をする。
 - ・どんなことを意識する必要があるか想起させ、練習に取り組ませる
 - ・技能ポイントを意識しながらアドバイスし合うよう声かけをする。
- 各チームごとにさらに記録を伸ばすための作戦タイムをとり。
 - ・効果的なアドバイスや練習を行えているチームを紹介し、参考にさせる。
- 課題をもとにもう一度練習の実践をする。
 - ・改善しようとしている点や強く意識して取り組んでいる点を認め合い、共有しながら取り組ませる。
- ③学習の振り返りとまとめ
 - できたこと、分かったこと、課題、友だちとの関わりについて振り返る。
 - ・技能ポイントを踏まえてどうだったか。
 - ・友だちとの関わりがうまかったチーム、気づきがたくさんあったチームに発表させ、次時のめあてにつなげさせる。



4 成果と課題

①課題の確実な把握と視点の明確化

子どもたちは「減速せずバトンをつなぐ」という課題に対して、渡し手、受け手それぞれの立場で視点をもち、学習に取り組むことができた。しかし、教師がねらう視点多すぎ、活動が多岐にわたりすぎた面が見られた。結果としてチーム内では共有できたものが、全体の場では単なる紹介にとどまってしまう場面が見られた。指導したいことは多いが、内容を簡潔に絞って伝え、取り組ませることが必要だった。

②活動の工夫、役割分担

一つの課題を違う立場から共有することで、チームとしての一体感が生まれた。しかし、課題を達成するためにどうすればよいか気づけない児童もおり、児童自らが気付くことができるような支援が必要である。

③友だちとの関わり

アドバイスをし合うことで互いの意識が高まり、技術的な面はもちろん、学習に取り組む姿勢も意欲的な児童が多く見られた。児童も、友だちと関わることでできなかったことができ、楽しく活動できた、という感想をもつことができた。体育があまり得意でない児童も学習に向けての意欲を高め、非常に効果的であった。